

平成 30 年 9 月 26 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	教育学部 4年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2019年3月卒業予定		

2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2018年2月22日	終了年月日	2018年8月26日
留学のタイトル	多文化社会ドイツにおける異文化共存のための教育・支援			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700字程度）				
<p>留学において、「多文化社会ドイツにおいて異文化共存のためにどのような教育・支援が行われているか」ということに焦点を当てて学びました。留学期間約6ヶ月間の中で、ドイツ・デュッセルドルフにあるNPO法人Watashiでのインターンシップを軸として活動を行いました。</p> <p>主な活動として、まず1つ目に、在独日本人の子供達が日本とドイツという2つの文化の狭間でどのような教育を受けているのか、どのような教育が必要とされているのかというテーマのもとで、子どもやその親と直接関わることで実情を知り、<u>Watashiでの活動を通してドイツでの日本語教育活動の支援を行いました。</u></p> <p>2つ目には、在独日本人だけに焦点を当てるのではなく、ドイツに住む移民・難民がどのようにドイツの文化に共存していくのかに焦点を当てて学びました。デュッセルドルフにある難民宿泊施設でのフィールドワークを行いました。さらに、<u>難民支援団体によるイベントの実施や、金銭的な問題で音楽教育が受けられない難民のための支援活動にも参加しました。</u>また並行して、ドイツの大学が大学進学を希望している移民用に用意している<u>大学準備コース（ドイツ語の語学コース）</u>に一学期間（約4ヶ月間）参加し、コースに参加しているドイツに住む様々な国籍を持つ移民・難民と交流をしながら彼らがどのように生活し、どのような問題を抱えているか、自分の目で現状を学びました。これらの活動を通して、日本人が外国でどのように外国の文化に共存し、どのような支援を必要としているか、多文化社会ドイツで生活する移民・難民がどのようにドイツ社会に入り、共存していくかを学びました。</p>				

3. 受入れ機関情報及びスケジュール

	1ヶ所目の機関	2ヶ所目の機関
国・地域	ドイツ	ドイツ
都市名	デュッセルドルフ	ボン
機関名 (英語)	Watashi-Wir Für Deutschland und Japan e.V.	University of Bonn

機関名 (日本語)	NPO 法人ワタシ	ボン大学
受入れ 機関 URL	http://www.watashi.info/	https://www.uni-bonn.de/

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 (6) ヶ月 / 授業料申請 (有・○無)

年 月	留学先機関	国・地域	主な活動
2018年 2月-8月	Watashi	ドイツ・デュッセルドルフ	インターンシップ
2018年4 月-8月	ボン大学	ドイツ・ボン	大学準備コース 大学進学を希望している移民用に開講されているコース

(3) 参加したプログラム (有・○無) (複数選択可)

本学の協定校交換留学		本学の協定校交換 留学以外のプログラム	
本学以外の機関による留学プログラム			

4. 留学の成果及びその測定方法 (300字程度)

成果発表 (論文、作品等)	○	単位取得		外国語能力	○	その他	
<p>・ 鹿児島大学グローバルセンターのホームページの「伝えよう！私の海外体験」にて成果をまとめ、「伝えよう！私の海外体験」等でプレゼンテーションを行い私の留学での活動や成果を発信します。プレゼンテーションでは、日本人学生だけではなく留学生などの外国人を招待し、私の今回の留学の活動内容のテーマに沿って意見交換を行います。</p> <p>・ 留学における活動成果をもとに、鹿児島県内での高校で講話を行い鹿児島の多文化共生教育の発展に貢献します。</p> <p>・ 語学面では、上級ドイツ語試験である TestDaF 試験を受験し、レベル4の合格を目指します。この試験は、外国人がドイツの大学入学を希望する際に入学条件としての語学証明となるものです。この試験において留学における語学力の向上を客観的に測定します。</p>							

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい (複数回答可)

5. 上記 4.も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

(500字程度)

<p>今回の留学は、「多文化社会ドイツにおける異文化共存のための教育・支援」というテーマに焦点を当て、その中でも幅広い方面に目を向けることができました。デュッセルドルフというヨーロッパ屈指の日本人街が存在する街で、日系 NPO 法人での活動を通し在独日本人の子供たちと関わったり、日本人コミュニティとドイツ社会との関わり合いを学び、現在ドイツ国内で重大なテーマになっている難民問題の現状についても、難民キャンプへの訪問や支援活動を通して知見を広げ、理解を深めることができました。</p> <p>語学の面においては、留学期間中ボン大学が開講する上級レベルの語学コースに通い、日常生活で使えるテーマからアカデミックなテーマまで学び、語学力の向上を達成することができました。これにより、ドイツ社会に自ら入るなどの活動の幅が広がり、例えば地元の人たちによる難民支援活動に関するミーティングへの参加や、難民との直接のコミュニケーションによりドイツでの生活の現状や問題を直接調査することができました。また難民支援について、国の問題としてではなく、実際に難民支援のために自ら能動的に支援活動を進める地域の人々が多くいて、ドイツ社会との統合のために地域自らの支援が必要不可欠だということを知りました。</p>
--

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500字程度)

鹿児島県内の私立高校で私の留学経験から講話を行います。私自身、大学に入学するまで海外を意識したことがなく、異文化についてすら深く考えたことはありませんでした。義務教育においても高校での教育においても異文化について学ぶ機会はあまりなく、身近に外国人があまりいない鹿児島県に住んでいる子供達にとって身近に感じられないテーマであると考えています。そこで高校生に、多文化社会ドイツでの現状を提示し、現実問題としての異文化共存について考えるきっかけを提供したいと思います。また、近年国際化が進み社会的にもグローバルな人材が積極的に求められている日本において、国をあげての留学推進のための活動が活発になっており、この講和によって、これから大学に進学しさらに次世代を担っていく高校生にとって海外を意識する契機になることも期待しています。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500字程度)

インターンシップ先での活動で、そろばん教室やその他にも子供たちとのワークショップを通し、大学での教育実習以来、初めて長期間にわたって先生という立場で教育現場に入り、自分の専門である教育という視点から子供との関わり方について深く考えました。さらに、在独日本人の子供たちの異文化に対する寛容性に驚きました。ドイツに住んでいる日本人という同じ背景を持つように見えても、実際はハーフの子供であったり、家族で移住してきたり、親の仕事の都合での滞在であったり様々な子供たちがいて、全員が必ず日本語を話せるわけではありません。しかし、人と違うということに違和感を持たず、それぞれが良さを持っていて互いに認め尊重し合う姿を目にしました。この考え方は、いじめが深刻な問題となっている日本の教育にとって多文化共生という面から必ず必要であると思いました。日本は島国で外国人の数も少なく、多文化に対する受容性があまり高くないと思います。そのことから人と違うということに敏感な人が多くいじめ問題に発展してしまう原因の一つになっていると私は考えました。大学卒業後、教育現場への進路を選ぶことになった場合は、自らの経験を生かして多文化共生教育に力を入れたいと思います。

平成 30 年 11 月 6 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	教育学部/4年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2019年3月卒業予定		

2. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。（700字程度）

【活動のタイトル】ドイツの異文化共存社会から考える日本の多文化共生教育についての課題

【活動の期間】 2018年10月6日

【活動の概要】 鹿児島県内の高校で留学についての活動報告・意見交換

テーマ 「ドイツにおける異文化共存社会」

今回の留学において、「多文化社会ドイツにおける異文化共存のための教育・支援」というテーマで学びました。その中でも「在独日本人への教育・支援」「ドイツの移民背景と難民問題」「音楽による支援活動」など幅広い視点からこのテーマについて学び深く考えました。今回、鹿児島地域の活性化の活動として焦点を当てたことは、未来を担う日本人の若い世代への幅広い視点の提供と、国際社会に意識を向けることの促しをすることです。ドイツで在独日本人の子供たちと交流する中で、このように多文化社会の中で育ち複数の文化を知り複数の言語を話すことができる子供たちは、将来日本と世界をつなぐ大切な架け橋になるだろうと思いました。さらに、日本の教育の中で育ち教育事情を知っている私だからこそこのような子供たちの存在の貴重性を感じることがありました。そこで、今回鹿児島地域を活性化する活動として県内の高校で私の留学についての報告会という形で高校生の前で話をする機会を設けました。留学に興味がある・国際問題に興味があるなどの高校生や、高校の教員らが参加し、私の発表についての意見交換をしたりもしました。

さらに発表後には留学についての相談の時間も設け、自身の体験からのアドバイスをしました。今回の報告会により、留学について真剣に考える契機になったりドイツでの多文化社会の現状や難民問題についても身近な問題として深く考えるきっかけになったであろうと成果を感じています。

3. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700 字程度)

鹿児島地域を活性化する活動として、「ドイツにおける異文化共存社会」というテーマのもとで報告会を行いました。この報告会を行った目的として、現代の高校生に国際社会・国際的な問題についてより身近に感じ、さらにそこから日本の多文化共生教育について考える、そして留学について前向きに考えてもらうためという2つがありました。

報告後に記入してもらったアンケートには「ドイツの現状を知ることができた」「日本にも多文化共生教育をもっと積極的に取り入れてほしい」「日本で困っている外国人がいたら助けてあげたいと思った」「留学したことのある人の話を初めて聞いて勉強になった」などの回答がありました。私自身が日本の教育について強く疑問を感じた「人と違うことが許されない教育、つまりみんな一緒であることが求められる学校教育」について報告会の中で問題提起をしましたが、それについて確かにと頷いたり、それが普通だと思っていたなどの声が聞けました。これらの反応から、私の活動の意図は達成できたと思います。

今後の課題としては、この自身の体験や意見をより広めていくことだと思います。今回の報告会で、話を聞いていた高校生の数も鹿児島県内の高校生の母数からするとごくわずか一部の人数です。特に多文化共生教育の推進という点からより多くの子供達に、様々な考え方を知って自分の価値観を獲得してほしいという願いもあります。また、学校教育現場で実際に子供達の近くで働く教員や、ここ鹿児島大学の教育学部で学ぶ学生達とも意見を交換したいと思います。なぜなら、子供達より教員の方が排他的な考えを持っていると考えているからです。